

永遠の命の希望説教⑦

詩編 62編2節～3節

わたしの魂は沈黙して、ただ神に向かう。神にわたしの救いはある。神こそ、わたしの岩、わたしの救い、砦の塔。わたしは決して動揺しない。

ペトロの手紙二 3章1節～13節

愛する人たち、わたしはあなたがたに二度目の手紙を書いています、それは、これらの手紙によってあなたがたの記憶を呼び起こして、純真な心を奮い立たせたいからです。聖なる預言者たちがかつて語った言葉と、あなたがたの使徒たちが伝えた、主であり救い主である方の掟を思い出してもらうためです。まず、次のことを知って下さい。終わりの時には、欲望の赴くままに生活してあざける者たちが現れ、あざけて、こう言います。「主が来るという約束は、いったいどうなったのだ。父たちが死んでこのかた、世の中のことは、天地創造の初めから何一つ変わらないではないか。」彼らがそのように言うのは、次のことを認めようとしなからずです。すなわち、天は大昔から存在し、地は神の言葉によって水を元として、また水によってできたのですが、当時の世界は、その水によって洪水に押し流されて滅んでしまいました。しかし、現在の天と地とは、火で滅ぼされるために、同じ御言葉によって取っておかれ、不信心な者たちが裁かれて滅ぼされる日まで、そのままにしておかれるのです。愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます。このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。

1. 究極的な希望としてのキリストの再臨

本日もまた、永遠の命の希望という主題の下に御言葉を聞いていきたいと思えます。一つ、皆さんに謝らなければなりません、最初に私はこの連続主題説教を10回いたしますと伝えましたけれども、もう少し短縮して、8回とさせていただきます。その理由といたしましては、説教を続けながら、テーマを一つ一つ考えてまとめているうちに、説教の中で重複したり、冗長的になってくるようなことが分かってまいりましたので、簡潔に8回にまとめた方がよいと思った次第です。そこで、本日で最後の週であります来週のテーマは、教義学の終末論と呼ばれるものを、永遠の命という主題に沿いつつ聞いていきたいと思えます。世界には終わりが来るということをわたしたち教会は信じております。なぜなら聖書にそう書いているからであります。そして、それはまず何よりも、私たちにとって究極的な希望であるがゆえに信じるべきことであるのです。なぜ、希望であるのか。神がお造りになられたこの世界は、神様が終わらせられる。それは決して絶望的な終わりではなく、神が正しく、良いものとして完成してくださるからです。また、この時は、わたしたち一人一人の信仰の完成の時でもあります。なぜなら、私たちの罪を取り除くために十字架において死んでくださり、復活してくださった主イエスが、私たちの救いを完成してくださる日であるからです。そうであるがゆえに、わたしたちは、この世界の終わりを、何か、天変地異が起こると考えていたずらに恐れるのではなく、この世界と私たちの救いの日として、希望の日として信じていけるのです。

2. 私たちの人生の完成について

さて、この世界の終末を考える前に、私たちの人生の終末を考えてみたいと思います。私たちは、生まれたその日から、日に日に、年をとっていきます。年齢を重ねても快活でありたいとわたしたちは願います。けれども、過去に犯した過ちや、将来への不安や、病気を患っていることや、家族のこと。生活のわずらわしさなどさまざまな問題がわたしたちの心を意気消沈させてしまうと思います。自分に残された時間がそう長くはないという現実を受け入れていく中で、それでもなお私たちの慰めとなり希望とは何か、ということを考えます。それは、単に、私はいつ、どのようにして死ぬのか、とか。死ぬ時には隣人に迷惑をかけたくない、というようなこの世の生活の患いよりも、本当はもっと私たちに大切なこととして、そのようなこの世の個人的な問題を越える、もっと遥かな希望がわたしたちには必要なのだということでもあります。そしてそのような希望こそが聖書が伝える希望であり、私たちキリスト者とその心の内にいつもたずさえていくべき希望なのであります。この希望に生きること自体がわたしたちのこの地上における使命であるとさえ言えます。

ルカによる福音書の第2章の25節では、マリアとヨセフが、幼子のイエスを神殿にささげる記事が記されており、そこでは、シメオンという老人が登場します。彼は、正しい人で信仰が篤く、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいたとあります。彼は、聖霊によって、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なないと告げられていました。シメオンは幼子のイエスを見て喜びにあふれて言います。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」シメオンには使命が与えられていました。それは、死ぬまでに必ずイスラエルの救い主。イスラエルだけでなく全世界の救い主である方を幼子として抱くであろうと。この素晴らしい主の約束を待ちわびること自体が、彼の生涯の最後の使命であったのです。そして、わたしたちもまた、同じように、主イエス・キリストを待ち望むこと。主をひたすらにこの世界の救い主として待ち望むことが使命として与えられているのです。

3. 私たちを支える慰め

わたしたちの教会が慣れ親しんでおります信仰問答に、ハイデルベルク信仰問答があります。この第一問については何度も紹介しましたがけれども、この第一問にも慰めという言葉が記されており、それは、シメオンが、イスラエルが慰められるのを待ち望んでいたような、どんな苦しみや、悲しみをも越える大いなる慰めであり、力ある慰め。このことを信じることで、今日を確かな足取りで生きていける、と言えるような慰めであり、ます。

問一「生きている時も、死ぬ時も、あなたのただ一つの慰めは、何ですか。」

答 わたしが、身も魂も、生きている時も、死ぬ時も、わたしのものではなく、わたしの真実なる救い主イエス・キリストのものであることでもあります。」ハイデルベルク信仰問答の第一問が語ることは、私たちがイエス・キリストのものであるとは、この私の全人生の罪を、その血をもって贖ってくださった主イエスが、その人生を、最後まで守り、保ってください、御自身のものとして受け止めてくださっているということを知る喜びであります。つまりどんな人生であっても、主は受け入れてくださるということ。わたしにおいてその恵みが起こっていることを信じる喜びであります。この信仰問答の問五十二も紹介したいと思います。

問五十二「生ける者と死ねる者とを、さばくための再臨は、どのように、あなたを、慰めるのですか。」

ここでも慰めという言葉が語られております。この慰めという言葉において、問一と問五十二は連なっていると言えるかもしれません。わたしたちの内に与えられたこの二つの確かな慰めは、どちらも、神が根拠なのです。神が私たちの救い。そしてその人生に責任を持ってくださる。それが根拠となる慰めであります。そして、問五十二では、その慰めが本当に実現する。目に見えて現れてくる。キリストが再臨されることにおいて、わたしたちの救いが完成するという約束であります。卑近な例でたとえるなら、人生全体が大学のための受験勉強であるとするなら、主イエスの再臨とは、いわば合格発表のときのようなものです。少し違うのは、受験勉強をして、

合格点に達しなければ大学には入れませんが、私たちの人生がどんなに赤点であったとしても、主はわたしたちを栄光の神の国に入れてくださることがすでにわかっているということです。わたしたちはもう主のものだからです。だからこそ、わたしたちは試練に耐えるのであって、その希望は決してわたしたちを怠惰にしないのです。すでに勝利してくださり、わたしの人生の主となってくださっている主イエスと共に、今日、この日の苦しみを耐え忍ぶのです。

そして、この日にはわたしたちの人生の苦勞が全て報いられる。そのような日であるのです。主イエスはやがて来てくださり、わたしたちにこう語られる。さあ、祝福された者たちよ、こちらに来なさい、と。マタイによる福音書の第 25 章に主イエスの再臨の約束とそのとき、すべての国々の民が全てその御前に集められて羊と山羊に分けられるということが語られています。羊とは救われた神の民。山羊とはそうではない人々です。しかし、わたしたちはここで山羊である人々が誰であるのかなどはわかりませんし、詮索するべきでもないということです。たとえ今は、神を信じないと言い張る人々であっても、あるいは、どんな悪人であったとしても、最後の最後に神を信じて救われる可能性があるからです。そしてもっと大事なことは、主イエスの十字架によって救われて、福音を喜ぶわたしたちは羊飼いの声を聞き分ける神の羊であるのだと。そう私たちは確信してよいのです。そしてもうひとつ、この信仰問答の問五十二が示しているのは再臨される主イエスは、先ずもってわたしたちのために死んでくださった方だということです。この箇所を答を読みたいと思います。

「わたしが、あらゆる艱難や迫害の中にも、頭を挙げて、この審判者を待ち望むことができるためであります。主は、わたしのために、すでに、神のさばきに対して、ご自身を与え、すべての呪いを、わたしから取り除いて下さり、また主とわたしのすべての敵を、永遠の罰の中に、投げ入れ、しかも、わたしは、すべての選ばれた者らとともに、み許に召し、天の喜びと栄光のうちに、入れてくださるのであります。」

主イエスの再臨がなぜ私たちにとって喜びであり、恐れを持つ必要がないのかというと、主イエスは世界を裁くために来られる。そういう厳しい面もあります。しかしそこでは、すでに私たちのために十字架において罪をかぶってくださった。わたしたちが受ける呪い。つまり滅びを、主イエスが十字架において受け止めてくださった。神と私たち罪人の間の仲保者となってくくださった方。もっと言えば、わたしたちの裁きの座における私たちの証人となってわたしたちを弁護してくださる方が、私たちの裁き主でもあるということです。それゆえにわたしたちは再臨の主イエスを全く恐れることはない。ある人がこのようなことを言っております。ミケランジェロの描いた最後の審判の大きな壁画には、審判者であるキリストが大きな体軀で腕を伸ばしておられる。その絵の中で、恐れて岩の隙間に逃げ込むような有様が描かれている。しかしこれは信仰の表現ではない、と。悪人であり、神に逆らい続けていた人々の中には恐れて逃げ込む人もいるのかもしれませんが、しかしわたしたち教会はそのような中でも、再臨の主を心から喜んで頭を挙げて待つべきなのです。わたしたちは期待してよいのです。再臨された主イエスが私たちに会いに来てくださるときの顔は決して恐ろしい顔ではない。十字架にかけられた主イエスを見捨てて逃げてしまって、どうしようもない思いで家に閉じこもっていた弟子たちに現れた主イエスのように、「平安あれ！」と仰ってくださるのではないのでしょうか。そして、そのとき、私たちの救いは本当の完成に至るのであります。

すでに、わたしたちはこの地上において罪を赦されております。罪とサタンの支配の下から、神の恵みの下に移っておりますが、まだ完全に罪の力からは自由であるとは言えません。罪の根っこは切り取られておりますが、まだわたしたちの内にどこかで息づいているようなところがあります。そういう罪の力との戦いが最後まであるのです。そこで、問五十二は、罪の力、闇の力が深く働くのは教会の迫害の時であると言います。そのような信仰の戦いの中でも、再臨の主を待ち望むのは、主イエスこそがこの世界のさまざまな理不尽な出来事を裁いてくださる方だからです。相変わらずロシアによるウクライナの武力行使が続いておりますけれども、その力に圧迫されてとうとうウクライナの四州がロシア側に編入されてしまったというのが現在の最新ニュースであると思っております。詳しいことはわたしは良く知らないのですが世界の情勢について説教で色々と言うべきではないかもしれませんが、こういう理不尽な状況を見てわたしたちは皆願います。ああ、主よ、どうかあなたこそがまことの審判

者として正しい裁きを行ってください！と。ウクライナのことだけではありません。これまでの世界の全ての理不尽な国々の政治支配。戦争、紛争、暴力、搾取、アパルトヘイトやホロコーストなどにおいて、その時代のキリスト者たちは主の正しい裁きが来ることを願い続けてきました。そのような祈りに主が応えてくださる日でもある。大いなる裁きの日。審判の日。それはこの世界に正しい決着をつけてくださる方。この世界の罪を清めてくださる方がおられるという約束が与えられている。それゆえにわたしたちは決して失望せずに頭を挙げて主イエスの再臨を待ち望めるのです。

私たちは迫害の時代には生きておりません。今後どうなるかはわかりませんが、今のところ、主イエスを信じているということに命を狙われるようなことはありません。しかし、主イエスの霊に導かれて、神の御言葉に従って生きようとするときに起こる苦しみもすべてわたしたちの十字架であります。神に与えられた仕事も、神からの召命であるならば、苦勞もあります。その十字架を背負っているのです。愛せよと命じられているとき、愛しがたい人をなお、愛して行こうと努めていくとき、それは主の十字架です。いつ治るのかわからない病気の中で、自暴自棄になるのではなく、与えられた人生をその最期まで、前を向いて生きようとするとき、それもまた主の十字架として受け止めていただけるのです。主イエスを信じて歩む私たち一人一人に与えられた十字架の道の向こうにあるのは、再臨の主イエスがわたしたちを喜んでくださっているその御顔を、きっと見ることができようことです。そういう日が将来、来るということ待ち望んでよいのであります。そしてそれが、年を重ねても、最後まで決して消えることのない希望なのです。主イエスが来られるということ待ち望みます。

4. 主の忍耐と憐れみのゆえに

先ほど、ペトロの手紙二の第3章の1節から14節を読んでいただきました。

この箇所は主イエスの再臨について語る有名な箇所の一つであります。この御言葉の約束を喜びと希望をもって待ち続けてきたのが2000年のキリスト教会の歴史であると言っても過言ではありません。その間に、教会は、異端との戦いや宗教戦争や、分裂などを繰り返してきましたけれども、それでも再臨の希望が途絶えることはありませんでした。主イエスがやがて再び来られて、世界を統治して下さり、正しい裁きと私たちの救いを完成して下さるという希望があったからこそ、これまでくじけずに、教会は立ち続けてきたと言えます。今日はこの箇所の9節以下に注目していきたいと思えます。

「ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます。このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。」

主の約束を待ち続けて2000年も経つのです。ですから約束はどうなったのか、神は約束を忘れていたのだろうか、と嘲る人々が教会の外にもいた。あるいは教会の中にも、主の再臨を信じられない人がいたかもしれません。ペトロはそこで語ります。主のもとでは、一日は千年のようであり、千年は一日のようであるのだと。千年間の長い月日のように大切な、決定的な一日があります。あるいは、一日のように、瞬時に過ぎ去るような千年もある。時間の長さが大切なのではありません。神の定める時の中で生きているかどうかということが問われるのです。つまり聖霊を受けた者として、聖霊に導かれて、神の恵みを受けて歩んでいるか、どうか、ということでもあります。そうすれば、主の定められた時の中で、私たちは歩むことができるのです。わたしたちのそれぞれの人生もそうあります。ただ長く生きればよいわけではありません。たとえ短い人生であったとしても、神の御心に従って生きたかどうか。それが問われます。神の定められた時があり、そのような時を知る知恵が私たちに与

えられていく。もちろん、いつ主イエスが再臨されるのかなどはわかりません。「主の日は盗人のようにやって来ます」とある通り、わたしたちにはその日は示されていない。しかしいつ主イエスが来られても良いように、私たちは与えられた人生を、主の定めに従って一所懸命に生きる。それぞれの人生の十字架を負って歩みとおしていく。それこそが再臨の主イエスの御前に恥じることなく立つための姿勢ではないでしょうか。主の定められた時の中で、この世界は主の摂理によって守られ、完成へと導かれていきます。人間の罪やサタンの働きなどによって世界は傾いていくように思えますが、神の御許しなしに起こっていることなど一つもありません。全てが主なる神の内に起こっていることです。主イエスの再臨を信じている人々の中にも、約束の実現が遅いのではないか。主は約束を遅らせているのではないだろうかと考える人々がいたようです。しかしペトロは伝えます。遅れているのではない。一人も滅びないで皆が悔い改めるように忍耐しておられるのだと。主の御計画が計画通りに進んでいないのではない。主は定められた時にこの世界を終わらせます。主イエス御自身がこの世界に来られる日は日々着実に近づいております。しかし同時に主はこの世界を忍耐して待ち続けておられます。皆が悔い改めるようにと。愛のゆえに忍耐しておられるのです。そして、わたしたちキリスト教会の伝道はいつも、この主イエスの忍耐のゆえに。憐れみのゆえに為されていくのだと言えます。先日お読みした箇所。ローマの信徒への手紙の第12章の1節以下をまた思い起こしていただきたいと思います。「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。」ここでパウロは、神の憐れみによって、と語ります。教会が、人々を信仰に招く時、その背後にはいつも神の憐れみがあります。その憐れみには神の忍耐もあります。そのように、神が忍耐してくださり、憐れんでくださっているこの日。この時こそが恵みの日、光ある時。救いの日なのであります。

パウロは、コリントの信徒への手紙二の第6章1節から2節でこのように語ります。「わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。なぜなら、『恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた』と神は言うておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。」この救いの日、恵みの日、まさにこの今この時に、主の招きに応じることが、御言葉を聞く人に求められております。そのようにして、主の定められた時に、いつでも頭を挙げておられるように、主イエス・キリストを私たちの人生の主として受け入れることを通して、やがて来られる、この世界のまことの王であり、審判者。再臨の主イエスを共に待ち望んでいきたいのです。お祈りをいたします。

教会の頭であられる主イエス・キリストの父なる御神様。あなたがやがて栄光をまといつつ、この世界を統治し、裁かれるために来られる日が来ることを御言葉を通して知らされましたから心から感謝いたします。私たちからこの希望が失われることはありません。主イエスが再臨してくださる。それが私たちの救いの完成の日。わたしたちの始まりの日が来ることを信じて待ち望みます。いつ主が来てくださっても恥ずかしくない歩みをさせてください。あなたの霊に支えられ、その日まで、この与えられた人生の時を、最後まで前を向いて歩み通していくことができますように。どんなに辛い日々も、あなたがその十字架の道に報いを与えてくださる日が来ることを信じて耐え抜いていくことができますように。今、病氣と闘っておられる兄弟姉妹がおられます。その苦しい日々を、主が支えてくださいますように。癒しと励ましをお与えくださいますように。今週の一週間の歩みを豊かに導いてくださいますように。施設で生活しておられる兄弟姉妹の上に。心身の疲れを覚えておられる兄弟姉妹の上にも主が伴ってくださいますように。全世界の平和が守られますように。核戦争に向かう悪い力からこの世界をお守りください。全ての為政者をあなたが支配してくださり、正しい裁きを下してくださいますように。主よ、あなたこそがまことの王であることを全世界が知る日が来ますように。

この言い尽くしません感謝と願いを主イエス・キリストの御名によって祈り願います。アーメン